

やまのぐち ばく  
山之口 獺

山之口獺（本名、重三郎）は、明治36（190

3）年、沖繩県那覇に生まれました。文学や美術に傾倒

し、様々な職業を転々としました。わかりやすい

言葉で表現した詩が特徴で、庶民感覚豊かな作品を

残しています。昭和38（1963）年に亡くなりま

した。

てん  
天

くさ

草にねころんでいと

がなか てん ふか

眼下には天が深い

かぜ

風

くも

雲

たいよう

太陽

有名ゆうめいなもの達たちの住すんでいる世界せかい

天てんは青あおく深ふかいのだ

みおろしておいると

体からだが落おつこちそうになつてこわいのだ

僕ぼくは草木くさきの根ねのように

土つちの中なかへもぐり込こみたくなつてしまうのだ

存在そんざい

僕ぼくら僕々ぼくぼくい言いつている

その僕ぼくとは、僕ぼくなのか

僕ぼくが、その僕ぼくなのか

僕ぼくが僕ぼくだつて、僕ぼくが僕ぼくなら、僕ぼくだつて僕ぼくなの

か

僕ぼくである僕ぼくとは

僕ぼくであるより外ほかには仕方しかたのない僕ぼくなのか  
おもうにそれはである

僕ぼくのことなんか

僕ぼくにきいてはくどくなるだけである

なとなればそれがである

見みさえすれば直すぐにも解わかる僕ぼくなんだが

僕ぼくを見るにはそれもまた

もう一廻ひとまわりだ

社会しゃかいのあたりを廻まわって来こいと言いいたくなる

ぼすとんばつぐ

ぼすとんばつぐを

ぶらさげているので

ミミコはふしぎな顔かおをしていたが

いつものように

手を振った<sup>てふ</sup>

いってらっしゃいと

手を振った<sup>てふ</sup>

ぼくもまたいつものように

いってまいりまあすとふりかえったが

まもなく質屋の<sup>しちや</sup>

門をくぐったのだ<sup>もん</sup>

【参考資料】

- ・ 「青空文庫」 <http://www.aozora.gr.jp/>
- ・ 『日本語を味わう名詩入門14 山之口獏』（あすなる書房）